

石井和紘氏「地球学・赤坂・海外数奇屋」講演にみる本物のアバンギャルドの意味



デザイン部会
連 健夫

J IAデザイン部会主催で9月15日、建築家・石井和紘氏を招いて講演会をした。「地球学・赤坂・海外数奇屋」という石井氏の最近の活動が伺えるキーワードのようなタイトルを頂いた。石井氏は東京大学大学院在学中24歳の若さで「直島町立小学校」を設計し、その後、「54の窓」など、衝撃的な作品で当時の話題をさらった気鋭の建築家である。イエール大学通勤留学経験からのポストモダニズムの視点と『数奇屋の思考』（鹿島出版会）に表現される日本文化への深い洞察、そして最近のCO2軽減を目指した建築など氏のダイナミックな展開について、実は私の中で繋がっておらず、この講演で氏の頭を解剖しようというのが、この企画の隠れた趣旨であった。当初1時間半講演に30分のディスカッションの予定が、3時間一気に氏の熱弁という展開となった。密度の濃い内容で、当初私が抱いていた疑問は次々に解消され、石井氏の思考が私の中で一本の線に繋がった。

それは氏の言葉に表れる「突き抜けていたい」「ホットでいたい」というアクティブな姿勢と共に、「自分で酔ってはいけない」「古典と触れておくことが大切」という自制的姿勢、一見、二律背反する態度が、氏の建築の魅力と共に地に足がついた創造的建築をつくり続けてきた源泉なのであろう。

東大吉武研という建築計画学出身とは思えないような「直島小学校」1982に見る創造的反骨精神、そこには背後の山と共に建築の存在感を子供たちに与えたいという



矢沢栄吉の武道館コンサートの絶唱「回転扉」

願いがあった。そして、建築の緊張感を取りたいとの思いからゲーム的要素のある「54の窓」1975（住宅）の設計に繋がり、さらに村を表現したいと「54の屋根」1979（幼稚園）の機能主義的思想からは決して生み出せない

多要素の建築をつくりだした。「ゲイブルビル」1980では様式をシニカルに捉えたファサード建築を提案している。これらは当時の建築の常識からは離れた前衛的建築として捉えられた。極め付きは「直島町役場」1982である。ポストモダニズムの氏の解答として日本の様式（飛雲閣）を参照するというかたちで明快に答えた屈指の作品であったが、建築思潮の成熟していない当時のクライテリアの中、ネガティブな評価もあった。しかしこれに対し「民主主義として戦ってきた町に相応しい建築」と施主である町長は言い切った。石井氏が「最初はガタガタするが後は好かれる建築が私の作品の特徴」というのも納得がいく。今日、市民参加の街づくりと共にヴァナキュラー（地域性・土着性）の現代化の必要性が求められているが、氏はすでにそれに手をつけていたことになる。つまり、氏の先見性ある展開に時代が追いついていなかったと解釈できる。「田辺エージェンシー」1983についてもそうである。施主の「芸の橋渡しをしたい」との思いを「橋」として建築を直接的に表現した。当時は形の斬新さだけがクローズアップされたが、氏は人の意識に着目し建築への変換をしていたのである。これは現代建築におけるナラティブ（物語性）にも通じるアプローチである。「数奇屋邑」1989の質の高さに建築学会賞が与えられたが、遅すぎた感さえある。その後、「熊本県清和村文楽館」1992や「宮城県慶長使節ミュージアム」1993



田辺エージェンシー 1983：施主の思い「芸の橋渡し」を形にした

石井和紘氏の熱のこもった講演



などの木造における様々なチャレンジは日本のみならず海外の建築家にも高い評価を受けている。AA アジアというアジアの建築家のネットワークがあるが、彼らを案内した時、氏の作品を「和の現代化の意味でとても面白い」と賞賛していたのが思い出させる。木造の探求は、CO2の減少という建築行為の責任を問う「常陸太田市総合福祉会館」2001へと繋がった。無垢の丸太に鉄柱を通し構造体にするという大胆な発想で建築空間をつくり、CO2減少という環境に配慮した姿勢は、地球温暖化防止活動大臣賞、さらにはJIA 環境建築賞の受賞に繋がった。ここには環境に優しいということのみならず、地球的視野で建築を捉えていたことに氏の懐の深さを感じる。氏の作品の歴史がようやく私の中で一本の線として繋がった。彼は、どうやら様式に深い洞察はあったが、それを目的にせず、そのコンセプトや意味の表現としての「形」に興味を持った建築家なのであろう。1970年代に近代建築の一義的価値観に反発した野武士と呼ばれたアバンギャルドの建築家たちの中で、今においても第一線で活躍している建築家は少ない。「形」のみに目を奪われた前衛は消え去り、「意味」に主眼をおいた前衛は、常に時代を創り続けてきたと言えよう。『日本建築の再生』(中央新書)などの著書でも伺えるが、日本でのポストモダニズムのあ

り方について、悩み考え抜いた下地が作品ににじみ出てきたのであろう。この講演で氏の創造性について分かったことが1つある。氏はきわめてアナロジーの能力に優れていることである。想像も及ばないことを次々と関連づけていく、矢沢榮吉の武道館コンサートでの絶唱「回転扉」と六本木ヒルズの回転扉の事故を繋げて論じることは凡人ではできない。また、進行中のプロジェクト、米国での数奇屋づくりの文化的緊張感を映画「キルビル」と重ねるなど創造力豊かなアナロジーが氏にはある。

さて、妥協せず迎合せず我が道を行く突き出た建築家は、これからどこに向かうのであろう。誰にでも受け入れられる一見善良な建築ではなく、次の時代をうかがわせる良い意味の刺激的問題作をつくり続けて欲しいと思うのは私だけであろうか。 (有)連健夫建築研究室 主宰



CO2 常陸太田市総合福祉会館 2001、地球温暖化防止活動大臣賞、JIA 環境建築賞

数奇屋邑 1989、建築学会賞